様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：奨励研究
研究期間：2020～2020
課題番号：１８Ｈ００００６

研究課題名　　効果のある英語授業での活動の繰り返し　～ICT機器を利用した振り返りと分析～

研究代表者
田中　里美（Tanaka, Satomi）

金沢大学・人間社会学域学校教育学類附属中学校・中学校教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　49,920円

研究成果の概要：申請者が勤務する中学校の生徒を研究の対象とした。実際の社会で起こりうる現実に即した場面設定で、５０分の授業または連続した授業の中での同じ場面での対話の繰り返し、毎回の授業初めの即興対話活動の繰り返しなどを実践した。全生徒対象のアンケート調査や生徒が対話を繰り返した授業後の記述式感想などを分析している。当初は、対話の繰り返しにより、対話の量・質がどう向上するかを生徒同士の対話の映像や録音した音声データで分析する予定であったが、コロナ禍による活動の制限などにより、計画通りに研究を進めることは困難であった。今後さらに研究を継続していく。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、英語の授業で対話を繰り返すことが、英語でのコミュニケーション力を向上させる上でどのように効果があるかを解明することを目的としている。従来、英語の授業では教科書の新出単語や基本文、本文の音読などの機械的な繰り返しやパターン練習はよく見られた。しかし、あるコミュニケーションの場面で、まとまった時間にその場で考えながら対話を何度か繰り返す活動については、これまでに実践例はほとんどなかった。ペアでの対話という思考力をともなう活動の繰り返しにより、英語での表現をどのように身につけていくかを、実際の英語の授業で検証を試みた。

研究分野：中学校の英語授業

キーワード：対話の繰り返し　即興対話　ICT

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究の目的

本研究は，英語の授業で対話を繰り返すことが，英語で話す力を向上させる上でどのように効果があるかを検証することが目的である。ペアでの対話という思考力をともなう活動の繰り返しにより，英語で表現する力を身につけることができたかを，実際の英語の授業で，（1）（2）の取り組みを実施した。学習の実態を把握するための英語学習調査（全生徒対象，４月と 12 月に実施）の結果を基に考察した。申請者が２年生の授業を担当した２回，３年生では１人１台端末のウェブブラウザ上（Google 社 Google Form）で２回の計４回実施した。なお，４月当初については，前年度の英語学習を踏まえて回答している。なお,対象生徒の２年生の３月時点での英語検定合格者は,３級以上が全体（159 名）の 79%，準２級以上が 54%だった。ただし，同等の英語力があっても未受検の生徒もいた。

（１） 継続した即興対話活動

①授業のはじめに，ペアで即興対話を毎時間している。現勤務校に赴任した７年前から全校で一斉に取り組みを始め，男女隣座席で全員が取り組んでいる。出だしの質問の一覧表を配布し，教師または生徒が毎回１つ選ぶ。３年間の日々の Project という意味で，ODP（Our Daily Project）と名付けた。ALT の授業では，ALT と１対１で即興対話をすることがいい刺激となっている。

②対話する時間は，話すことが苦手な生徒でも続けて取り組めるよう，段階的に話す時間をのばした（表２）。学年の最終目標時間は，４月当初に生徒に伝えている。同時に（即興で）発表する力を育てるために，対話の後に，１（２）組が発表したり，発表以外の生徒が聞いた内容をまとめてレポートするなどしている（表２）。すべての生徒が半年に１回は対話を発表し，レポートもすることになる。話すときに間違えやすい代名詞や時制を，その場で修正することができる。

表１

１年生:40 秒～70 秒
２年生:70 秒～100 秒
３年生:100 秒～120 秒

表２

１年生:同じペアで１-２組が全体発表＋教師(生徒)の QA1-3
２年生:違うペアで１組が全体発表＋口頭レポート 3-4 文
３年生:違うペアで１組が全体発表＋口頭レポート 4-5 文

③前時やその後の授業内容に関わりのあるつながるような出だしの質問を提示した。その際，例 1，2 のように，文法と内容の 2 点でつながりをもたせた。

例１・ODP　How often do you talk with your family?
　　・新出文　How long have you have you been playing soccer?(NC3)
例２・ODP　Which do you like better, spicy curry or sweet curry?
　　・新単元　Languages in India の導入(NC3)　　SS:Sunshine NC:New Crown

（２） １時間または連続した授業での対話の繰り返し

① ある社会的な場面を設定して，対話の繰り返しをした。教科書にある Project(My Project)も含めた場面例は以下の通りである。（勤務校紀要 2016,20,21,読売教育賞論文参照）

１年「アミットに我が家の家庭料理をご馳走しよう」(SS)
２年「予定のない外国人観光客を誘って金沢を巡ろう」(SS)
　「世界の人たちと共存するために，未来の理想の学校を提案しよう」(SS)
　「アフリカの子どもたちのために，レッドカップキャンペーン商品を企業に提案しよう」(SS)
３年「日本限定のアイスクリームを海外の企業に提案しよう」（NC Project1）
　「俳句の魅力を T シャツで外国人（留学生）にアピールしよう」(NC Project2)

②対話をただ繰り返すだけでなく，別の活動と組み合わせて話す力の向上を試みた。組み合わせのパターンをまとめたものが，A～C（表３）の３つのパターンである。実際の授業での活動取例も同時にまとめた。この実践の結果，２回目の対話では，話す内容に明らかな変化が見られた（関西英語教育学会研究大会）。また，Project の発表活動では，ALT，留学生など相手を変えて発表した後に即興対話（質問）を繰り返した（表３C2）。

表３

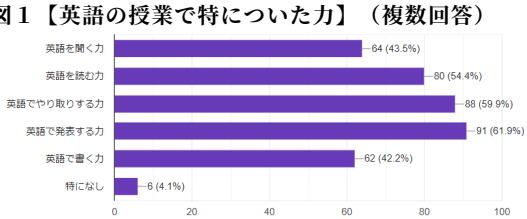
A：□＋話す活動①→話す活動②　B：話す活動①＋□→話す活動②　C：話す活動①→話す活動②＋□	
A　ブレーンストーミング＋話す活動①→話す活動②	B1 話す活動①＋問題提示→話す活動②
B2 話す活動①＋キーワードで整理→話す活動②	B3 話す活動①＋モデル→話す活動②
B4 話す活動①＋情報収集→話す活動②	B5 話す活動①＋長文の提示→話す活動②
C1 話す活動①→話す活動②＋書く活動	C2 話す活動①→話す活動②＋即興質問

２．研究成果

（１）英語で話す力がついたという実感

①英語学習調査で，４技能５領域の中で，英語の授業で特についたと思う力を尋ねた。４月は「やり取りする力」の次に「発表する力」が，12 月では「やりとりする力」と「発表する力」は同等の結果で（図１），９割の生徒が，授業で力がついたと答えた（図２）。さらに，特に効果のあった活動として，ODP と Project 等の発表がどちらにもあがっている

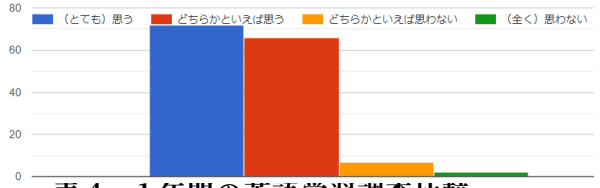
図１【英語の授業で特についた力】（複数回答）



（表４）ことから，２つの取り組みで，生徒は英語を話せるようになったと実感できたといえる。

図２「英語学習調査 2021 年度 3 年生（12 月）の結果」より抜粋

【英語の授業でやり取りする力がついた】



【英語の授業で発表する力がついた】

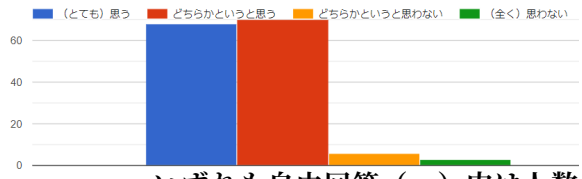


表４　１年間の英語学習調査比較　　いずれも自由回答（　）内は人数

やり取りする力の向上に効果のあった活動		発表する力の向上に効果のあった活動	
4 月（35 人回答）	12 月(53 人回答)	4 月（74 人回答）	12 月(87 人回答)
即興対話活動（ODP）16	即興対話（ODP）　25	Project 等の発表　53	Project 等の発表　74
Project 等の発表　7	Project 等の発表　17	即興対話活動（ODP）6	即興対話活動（ODP）8
リテリング　2	リテリング　2	リテリング　2	リテリング　3
その他　10	その他　9	その他　13	その他　2

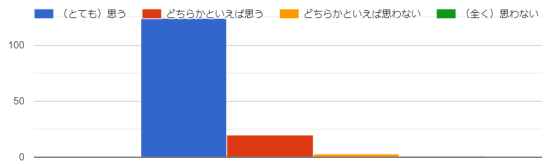
②繰り返し対話をした授業後に感想を書かせたところ，原稿がないことについて「原稿がないとすごく不安で，あせってしまう」「即興での対話をスラスラいえるように練習したい」「普通の会話は，その場で考えなければならないので，そういう力をつけていきたい」などとあった。生徒は即興で話すことに不安を抱きながら，できるようになりたいと思っている。日本語から英語に直訳するだけでは対応できないと気づく生徒もいた。同じ感想で，話すことを繰り返したことについては，「相手が何を言うかわからないので Really?とかも本当っぽくなる」「自分の話したいことを話せて会話を楽しめた」「（2 回目は）違う内容で対話できて面白かった」「友達が次にどんなことを言うかわからず，いきなりきた質問にスムーズに答えるのが難しいが，即興の方がいろいろな方向に話が飛んで面白かった」等の感想があった。また，99%の生徒が「対話する力」がついたと授業後に回答した。

（２）英語の授業と実社会(将来)とのつながり

英語の授業が，将来に役に立つと感じている生徒は多く，増加傾向にある（図３A，表５②）。将来役に立つ理由として，「海外の人と交流するとき」「海外旅行に行くとき」「海外で仕事や生活をするとき」という状況が最も高かった。興味深いことに，高校入試を強く意識している 3 年生の時期でも「進学するとき（高校入試や大学入試）」よりも高い結果となった（図 3B）。これは，実社会を想定した対話により，将来英語を話す場面を思い描くことができたからではないかと推察される。

図３「英語学習調査 2021 年度 3 年生（12 月）の結果」より抜粋

A【英語の授業で学習したことは将来役に立つ】



B【将来英語はどのように役に立つか】（複数回答）

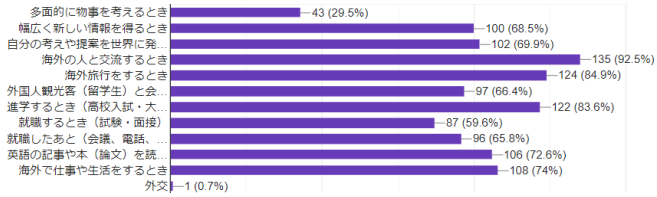


表５　２年間の英語学習調査結果推移

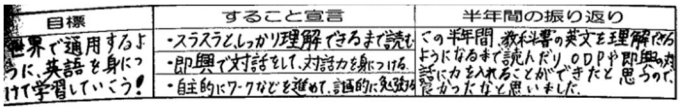
質問項目	4 月（２年）	12 月（２年）	4 月（３年）	12 月（３年）
①　英語の学習は好きだ	81%（47%）	79%（48%）	**88%**（44%）	85%（43%）
②　英語の授業で学習したことは将来役に立つ	94%（77%）	96%（75%）	96%（**85%**）	98%（84%）
③　英語の授業でやり取りする力がついた	90%（47%）	**97%（58%）**	92%（52%）	94%（49%）
④　英語の授業で発表する力がついた			90%（43%）	94%（46%）

太字：前回から 5%以上の上昇　（　）：「（とても）そう思う」と答えた生徒の割合

（３）　英語学習の動機付け

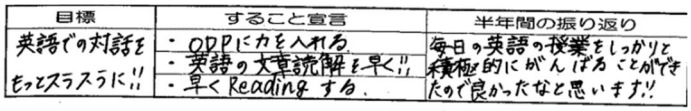
一般的に，学年が上がるにつれて学習意欲は減退する傾向にあるが，３年生の 12 月で「英語の学習が好き」と答える生徒数は微増した（表５①）。これは，英語で話す機会を通して，互いに理解したり達成感を味わう経験をしたことが要因だと考える。英語学習の動機づけの面からも，話す活動は意義がある。図４は，英語学習に興味のある生徒が，３年生で書いた学習カードである。学期はじめの目標をそれぞれ見ると「世界で通用するように英語を学習していこう！」（前期）「英語での対話をペラペラに！」（後期）とある。その目標を達成するために，「ODP に力を入れる」ことを宣言している。このように，中学校３年生でも，英語を話せるようになりたいと望んでいる生徒は多い。その願いを果たせるように，今後も取り組みを続けていきたい。

図４　　前期学習カード（2021）



目標	すること宣言	半年間の振り返り
世界で通用するように、英語を身につけて学習していこう！	・スラスラと、しっかり理解できるまで読む ・即興で対話をして、対話力を身につける。 ・自主的にワークなどを進めて、計画的に勉強	この半年間、教科書の英文を理解できるようになるまで読んだり、ODPや即興の対話に力を入れることができたと思うので、良かったなと思いました。

後期学習カード（2021）



目標	すること宣言	半年間の振り返り
英語での対話をもっとスラスラに!!	・ODPに力を入れる ・英語の文章読解を早く!! ・早くReadingする。	毎日の英語の授業をしっかりと積極的にがんばることができたので良かったなと思います!!

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 田中　里美
２．発表標題 繰り返し話すことによる生徒の変容～教室での話す活動を通して～
３．学会等名 関西英語教育学会研究大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
榎本　剛士	(Enomoto Takeshi)